

P-35

長期療養と看取りが主体であった療養型病院におけるリハビリテーション普及に向けた取り組み事例

石井大輔/土屋倫子/北村真治郎/高柳美緒子/山田智子/今井典子/難波奈美子/堀口翔/渡邊武宏

長岡病院 リハビリテーション課

1. はじめに

これまで長期療養・看取りを主体とし、リハビリの位置付けが低い当院であったが在宅療養支援体制強化の一環としてリハビリの充実を図ってきた。今回当院のリハビリ普及に向けた取り組み事例を報告する。

2. 施設概要

※2023年 3月末時点

(長岡病院) 病床数: 162床	平均在院日数: 921日	平均年齢: 87.1歳	平均介護度: 4.2
(介護医療院) 入所数: 56床	平均在所日数: 1171日	平均年齢: 88.9歳	平均介護度: 4.4

3. 課題と対策

目標
患者、家族のQOL向上に寄与する

課題
リハビリに対する認識・理解が低い

要因
患者/家族/職員と関わる時間が少ない

対策
①リハビリの量と質の向上
②他職種との信頼関係構築

①リハビリの量/質の向上

- ・作業環境と人員配置の整備
- ・物理的環境の整備
- ・情報処理の迅速化
- ・OT/STの採用
- ・吸引体制の整備
- ・離床/経口摂取/家族ケアの促進など

②他職種との信頼関係構築

- ・病棟業務への参加と協業
- ・院内外への情報発信
- ・自宅退院支援



言葉を話す



積極的な離床



日常的な離床



家族との触れ合い



褥瘡回診に参加



気持ちを伝える



口から食べる



レクリエーション



退院前の家屋調査



院内勉強会

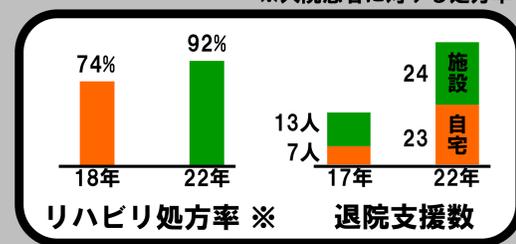
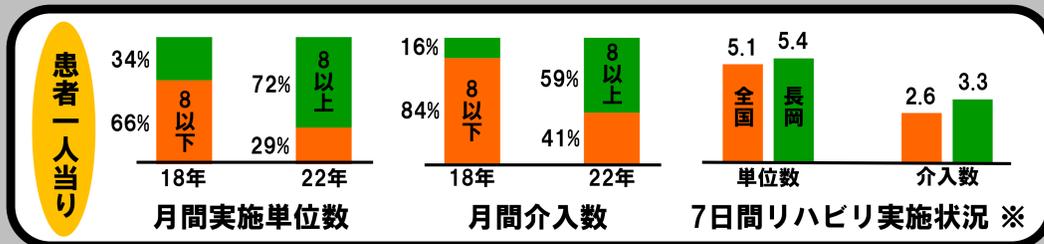
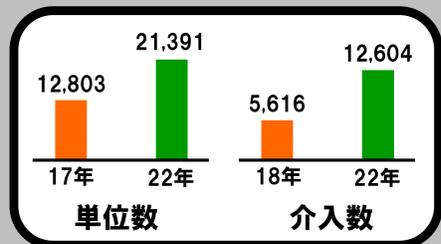


地域住民向けセミナー

4. 結果 / 実績

※「18年度 療養病棟入院料1算定施設の平均」と「23年3月末時点の長岡病院」の比較

※入院患者に対する処方率



★その他… 離床の習慣化 / 経口摂取に対する意識向上 / ポジショニングの普及 / 自宅退院支援の普及

5. 考察

リハビリ(課)が患者、家族のQOL向上に貢献できる存在になり得たのは、これまでの働く環境を見直して**患者、家族、職員と交流する機会を増やした**こと、スタッフ全員で地道に**信頼関係の構築**を行ったことと考える。

6. おわりに

今後、少子高齢化により介護の担い手が不足し**在宅療養以外の選択**も増すと考える。「長期療養・看取り」に加え「在宅療養支援」の体制整備は**患者、家族の選択肢**を増やしQOL向上の一助になり得ると考える。

★ 私たちが大切にしていること ★

- ① 一人一人に合わせたリハビリを行います
- ② 口から食べること、コミュニケーションをとることを大切にします
- ③ ご自宅や施設への退院をお手伝いします
- ④ お部屋の外で過ごすこと、人と触れ合うことを大切にします
- ⑤ 「幸せ」を感じていただくことを大切にします
- ⑥ 人生の最期まで寄り添います